

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531087

研究課題名(和文) 国際バカロレアによる日本型公立高校モデルの構築に関する実証研究

研究課題名(英文) Empirical research on Japanese models of public high schools based on the International Baccalaureate

研究代表者

岩崎 久美子 (IWASAKI, KUMIKO)

国立教育政策研究所・生涯学習政策研究部・総括研究官

研究者番号：10259989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：国際バカロレアの発展段階を、国際学校やUnited World Collegeなどへの創設時期の導入・普及、英語圏における教育の質の向上の指標としての私立学校を経て公立学校への導入・普及(米国・英国)、非英語圏における国際化重視の風潮での私立学校から公立学校への拡大(ドイツ・中国・日本)として捉え、米国・英国・ドイツ・中国・日本の5カ国における公立学校への国際バカロレアの導入の政治的・社会的背景を現地調査で明らかにした。また、日本の公立学校への導入の過程を調査し考察した上で、英語重視と海外指向の二つの軸から、海外対応型IBモデル、日本型IBモデル、IB研究・開発モデルの三つの類型を提示した。

研究成果の概要(英文)：The development of the International Baccalaureate was a three-stage process. The first stage was the introduction of the International Baccalaureate into international schools and United World Colleges early on. The second stage was its spread into private schools and then public schools in English-speaking countries, such as the USA and UK. The third stage is the current expansion of International Baccalaureate schools from private schools to public schools in non-English speaking countries, such as Germany, China, and Japan. Based on field surveys in the above five countries, the political and social backgrounds regarding the increase of International Baccalaureate public schools were identified. Finally, three models—the global International Baccalaureate school model, Japanese International Baccalaureate school model, and International Baccalaureate research/development model—were defined according to their axis of emphasis on spoken English and on their foreign status.

研究分野：教育社会学、生涯学習論

キーワード：国際バカロレア ディプロマ・プログラム 高校教育 政策立案 公立学校

1. 研究開始当初の背景

(1) PISA型学力を具現化するIBカリキュラム

グローバル化の進展や知識基盤社会と呼ばれる現代社会の趨勢は、子ども達がこれからの社会で身につけるべき知識や技能のあり方を問い直し、OECD/PISA (OECD生徒の学習到達度調査) が重視する、キー・コンピテンシーの概念に基づく PISA型学力 が社会的に要請され始めている。このような PISA型学力 は、バーンSTEIN (Bernstein, B.) が指摘する「見えにくい教授法」(invisible pedagogy) に相応し、探求学習 や 総合的学習 といった教授・学習スタイル、教科横断的カリキュラム による 応用力・活用力、問題解決能力養成 の重視といった特徴を持つ。そのため、家庭の 文化的資本 に左右され、競争主義に拍車がかかる危険性が指摘されている (藤田「教育改革を問う」, 2009)。家庭環境の持つ 文化的資本 の是正を視野に入れた公教育への教授・学習方法の確立や PISA 型学力を反映した学習指導要領の編成は、教育の平等性を保証する可能性はあるが、こうした観点からの検討は十分されてきたとは言い難い。

一方、国際バカロレア (IB) は、体系化された 教科横断的カリキュラム によって、複眼的・批判的・戦略的思考を養成するとされ、PISA 型学力と IB のアプローチの指向性や内容に類似性が見られる。IB に関する先行研究では、『国際バカロレア課程に関する調査研究報告書』(澤田ら、1996)、『国際的学力の探求-国際バカロレアの理念と課題』(西村、1989) や『国際バカロレアの研究』(高野、浅沼ら、1998) 等があるが、PISA型学力 はその後注目されたもので、IB に PISA 型学力の能力目標がどのように位置づけられるかの検証と理論化が課題として残されている。

(2) 諸外国の政策：公立高校への IB の導入

公立高校への IB 導入は、自国の教育制度や文化的独自性と拮抗するものであるが、PISA 型学力などの 国際標準の学力 を求めて、英国、

米国などの英語圏に加え、ドイツや中国では IB を教授する公立高校 が増加している。これらの公立学校における IB 導入の際の国内の法的整備や他の学校との比較における教育効果など、我が国が参照する際に明らかにされるべき論点がいくつかある。本研究では、海外調査により、IB が導入された公立高校の実態を明らかにし、日本の公立高校への IB 導入に関し、「IB 導入は日本の公立高校になじまない」という帰無仮説を実証的に検討する。

2. 研究の目的

IB は、国際学校の生徒を対象に開発された教科横断的カリキュラムを特色とする優れた民間教育対象のプログラムである。従来、英語圏では、一部の私立学校や公立学校で IB を導入する機会があったが、近年、ドイツや中国などの非英語圏にあっても、教育の質の向上のための指標 として 公立高校への IB の導入 が図られてきている。

本研究では、諸外国の公立高校への IB 導入の動きから、高校生対象の DP プログラムを中心に、1) IB の 教科横断的カリキュラム に見る PISA 型学力 の目標との関連、2) IB を導入した公立高校 の国内の法的位置づけと IB プログラムの公設の意義と課題を明らかにし、3) 日本の社会的特性を踏まえた 日本型 IB 公立高校モデルの構築 とその可能性を実証的に検証する。

3. 研究の方法

(1) 国内調査：文献調査 (先行研究) と IB カリキュラムを実施している国内の国際学校や私立学校での調査を実施し、それを踏まえ海外調査項目を策定する。

(2) 海外調査：米国、英国、ドイツ、中国の公立 IB 高校、その学校を管轄する地域の教育委員会担当者を対象に、訪問面接調査を実施する。

(3) IB 日本語担当教師調査：IB を日本で教え

ている日本語教師対象に、調査を実施する。

4. 研究成果

(1)国内調査

国内にある IB プログラムを導入し、実績がある国際学校（K.インターナショナルスクール）、私立学校（立命館宇治高校）を訪問し、IB 導入の経緯、進学実績、公立学校への IB 導入に対する意見を聴取した。

併せて、公立学校に IB 導入を検討している東京都、佐賀県、福井県、北海道札幌市の各教育委員会を訪問し、導入を検討するに至る過程を調査した。この中で、IB 校をすでに開校した東京都と札幌市は、それぞれ、英語版 IB 対日本語版 IB、そして高校対中等教育学校（中高一貫校）という異なる類型の代表である。東京都教育委員会に関しては、東京都教育庁「国際バカロレアの導入に向けた検討委員会」委員として、IB 導入をめぐる政策立案過程を参与観察することが可能となった。また、委員として、科研の研究成果の一部を 2013 年 4 月 16 日の同会議において発表する機会も得た。

北海道札幌市教育委員会では、関係者へのインタビュー調査を行うと同時に、依頼により科研の成果を踏まえ、教員研修会で「国際バカロレア（IB）プログラム導入に向けて」（2013 年 11 月 8 日）と題した発表を行った。

国際バカロレアに関心を持ちながらも実施に至っていない佐賀県や福井県の教育委員会では、IB 導入の課題や、IB の教育内容を日本のカリキュラムの枠組みに柔軟に適用させ、より良いカリキュラム策定について検討しているなどの現在の状況を把握した。

(2)海外調査

スイス民法典に基づく財団法人国際バカロレア機構（The International Baccalaureate Organization, IBO）が提供する教育プログラムとして 1968 年に発足後（日本は 1979 年認証）、国際バカロレアは三

つの段階で発展してきた。

第一段階は、国際学校や United World College(UWC)などの学校での導入であり、第二段階は、英語圏での私立学校、そしてその後の公立学校への普及である。第三段階は、非英語圏における私立学校から、公立学校への拡大である。

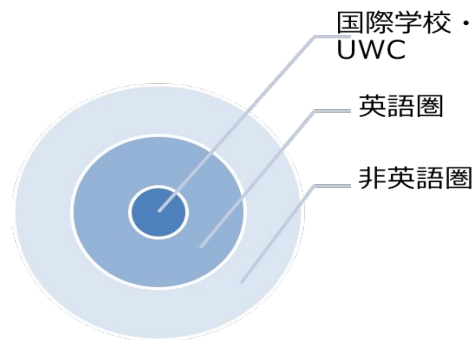


図1 IBの拡大の動き

英語圏はIBを導入しやすい土壌があるが、米国では特に学校の質の保証としてIBが導入されている。富裕層は良い学校があるところに居住地を決める傾向があるため、行政も納税者の関心にそった教育環境の提供を考慮する。そのため、公立学校を改善し再生する方途として、IBをパッケージとして学校に導入する例が多い。

同じ英語圏でも英国では、ブレア政権時に、カリキュラム改革の一形態として、公立学校へのIB導入が補助金により促された。

一方、非英語圏として、ドイツをみれば、国内大学進学資格としてIBを認可し、ヨーロッパ市民としての国際的資質の育成に資する国際的プログラムの一つとして、卓越したギムナジウムで一部導入されている。

非英語圏であり、アジアでもある中国では、海外の大学から中国の優秀な学生を獲得する動きが加速されており、富裕層を中心に欧米大学進学者が急激に増加している。このような中で、IBは、海外の大学進学資格の一つとして重要視されている。

以上、海外調査として、①米国調査では、IB 北米事務所、ワシントン DC の国際学校、メリーランド州・ヴァージニア州の公立学校、教育委員会（2012 年 9 月）、中国調査では、上海、南京地域の公立学校（2013 年 3 月）

ドイツ調査では、デュッセルドルフ、並びにその近郊地域にある国際学校、公立学校、教育委員会（2013 年 9 月）、英国調査では、ハーグ（オランダ）にある IB アフリカ・ヨーロッパ・中東事務所の他、英国教育省、ケント州教育委員会、公立学校（グラマースクール男子校、女子校）、ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）インターナショナル（2014 年 9 月）をそれぞれ訪問調査し、現地にて情報を収集した。その成果に基づき、分担者等で報告書原稿を分担執筆し、国立教育政策研究所紀要や、雑誌論文（文部科学教育通信等）に掲載した。その他、上記原稿を収録した書籍を今年度中に刊行予定である（『国際バカロレアの挑戦』明石書店、刊行予定）。

(3)IB 日本語担当教師調査

世界各地の国際学校において、国際バカロレアの日本語（A1）を教えている教師を対象に属性、勤務環境、満足度などの 25 項目からなる調査を依頼し、49 人から回答を得た。回答内容は、単純集計を作成し、回答者にフィードバックするとともに、原稿を執筆し、上記書籍に収録予定である。

なお、調査データの一部を用い、依頼により、IB の日本語教育に関し、国語教育雑誌へ原稿を執筆した（岩崎久美子「国際バカロレアから考える国語教育の未来像」『国語教室』）。

(4)国際バカロレアによる日本型公立高校モデル

我が国における IB による公立高校モデルは、いずれも教育内容の改善を求める点では同じであるが、英語を重視するか、海外指向（海外大学進学に重点を置く）かどうかで大きく三つに分類される。一つは、海外対応型

IB モデルである。グローバル化に対応し、英語による国際バカロレアプログラムを行う公立高校が該当する。いわば、公立学校に国際学校の制度を取り入れた公立インターナショナル・スクールとも言えるものである。授業は英語で行われ、卒業生は海外の大学への進学を指向する。第二は、日本型 IB モデルである。IB の教育プログラムの枠組みを活用し、IB の一部を日本語で実施するものである。参加型授業を中心とした IB プログラムにより、学び方のスキルを習得しうる点で、先導的試行ともいえ、高校教育の内容を向上、改善する目的で用いられる。形態としては、①中高一貫校の中でカリキュラムを比較的自由に編成できる中等教育学校において、中等教育プログラム（MYP）とディプロマ・プログラム（DP）を一貫して実施するもの、あるいは、卓越した教育が期待されるスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）やスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）などの指定を受けた高校で DP 導入をする場合、などが想定される。

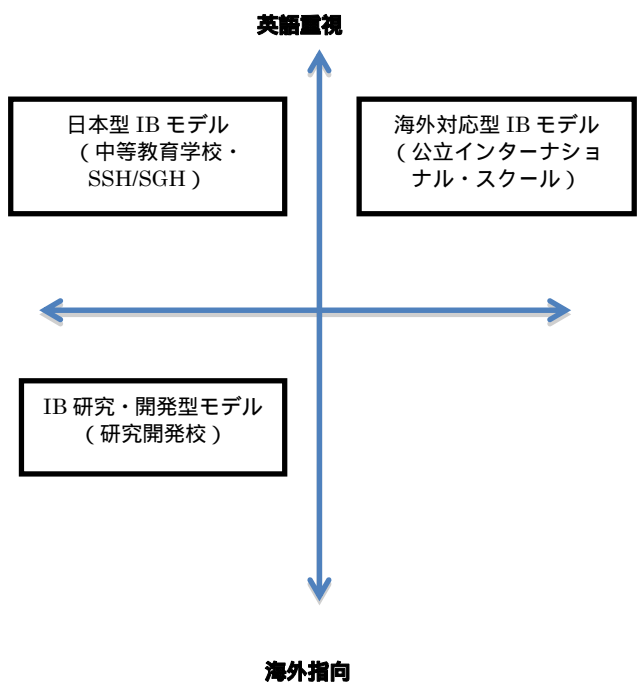


図 2 IB 公立高校モデル類型

第三は、IB 研究・開発型モデルである。IB の内容を研究し、教育課程にその長所を最大限取り入れ、日本の教育環境に即した、独自の新しいカリキュラム開発を行うものである。IB の研究指定校となった学校の多くは、IB の長所や教育方法を研究し、現在のカリキュラム改善に柔軟に取り入れている。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- (1)岩崎久美子、国際バカロレアの歴史、文部科学教育通信、No.309、2013、pp.22-23.
- (2)金藤ふゆ子、国際バカロレアの特徴:CAS、文部科学教育通信、2013、pp.26-27 .
- (3)黄 丹青、中国における国際バカロレア導入の概況及びその背景について、国立教育政策研究所紀要、査読有、第 142 集、2013、pp.149-159.
- (4)岩崎久美子、「国際バカロレア」が日本で普及するために、2013、*nippon.com* (<http://nippon.com/ja>)
- (5)岩崎久美子、国際バカロレアから考える国語教育の未来像、国語教室、No.100、2014、pp.28-31.
- (6)黄 丹青、中国での IB 導入のその後、文部科学教育通信、No.360、2015、pp.28-30.

〔学会発表〕(計 1 件)

柳田雅明、飯田直弘、花井渉、岩崎久美子、教育プログラムとしての「バカロレア」の多種多様性、第 49 回日本比較教育学会大会、2013 年 7 月 6 日、上智大学

〔図書〕(計 1 件)

(1)岩崎久美子、事例：札幌市立高校における国際バカロレアの導入、国立教育政策研究所編『高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究 報告書』2014、

pp.272-285.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

○取得状況(計 件)

名称：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

岩崎 久美子 (IWASAKI, Kumiko)

国立教育政策研究所・生涯学習政策研究部・総括研究官

研究者番号：1 0 2 5 9 9 8 9

(2)研究分担者

金藤ふゆ子 (KANEFUJI, Fuyuko)

文教大学・人間科学部・教授

研究者番号：9 0 2 5 4 9 0 3

(3)連携研究者

黄 丹青 (KOU, Tansei)

目白大学・外国語学部・准教授

研究者番号：1 0 5 5 0 6 9 2